

学校と地域とのつながりの基盤をなす 地域連携カリキュラムの創造

木下 満明*¹・美作 健悟・静屋 智

Developing a Regionally Cooperated Curriculum
based on the firm relationship of a school and the community involved

KINOSHITA Mitsuaki*¹, MISAKU Kengo, SHIZUYA Satoru

(Received August 3, 2020)

キーワード：地域連携カリキュラム、カリキュラム・マネジメント、コミュニティ・スクール

はじめに

コミュニティ・スクールとしての取組を推進することによって、学校を取り巻く環境は大きく変わってきたと感じている。もともと学校の「外の風」を利用し、学校運営をより充実させるという本来の目的を越えて、地域住民と保護者が学校という地域の中に存在する価値ある教育資源を中核として、それぞれの力を集結し、子供たちを育てようという大きな動きが始まっている。

また、学校の存在が、単に子供を育てる拠点というだけではなく、緊急事態発生時の地域防災の拠点をはじめ、地域活性化の一翼を担う存在として再認識され始めている。

そこで、本稿では、このような時だからこそ、シンプルに今一度「子供」を中心において「いかにつながりながら子供の育ちを支えることができるのか」について、本校のコミュニティ・スクールとしての取組を再評価しつつ、新たな「地域連携カリキュラム」という視点から提案することにする。

1. 地域連携カリキュラムについて

1-1 地域連携カリキュラムをどう捉えるか

平成28年4月1日現在で、山口県内のすべての市町立小・中学校に学校運営協議会が設置され、コミュニティ・スクールが導入された。各中学校区では、コミュニティ・スクールが核となって地域のネットワークを形成し、学校、家庭、地域が連携・協働しながら、社会総がかりで小中9年間の子供たちの学びや育ちを見守り支援する「やまぐち型地域連携教育」が推進されている。「やまぐち型地域連携教育」を推進することで、各小・中学校のコミュニティ・スクールとしての取組の充実はもちろんのこと、小小連携や小中連携の充実、さらには、保育所や幼稚園、認定こども園、高等学校、特別支援学校等との学校間連携を一層進め、地域の様々な社会教育団体等がつながり、地域ぐるみの教育支援体制の強化が図られてきた(図1)。

こうして、コミュニティ・スクールとしての取組が充実する中、その取組が単発的であったり、一過性のものであったりするのではなく、持続可能な取組として地域に確かに根付くことが求められている。

図1の右下に示されているように、これまでの取組を見直しながら教育課程を編成し、カリキュラム・マネジメントを進めていくことが重要となっているのである。

各学校における具体的な作業は、次のようなものである。

- ・「目標」(子供に付けたい力、目指す子供の姿)の再検討
- ・「目標」と実践の結び付きの確認
- ・実践を効果的に行うための組織の整備

*1 下関市立熊野小学校(令和2年度山口大学教育学部附属教育実践総合センター共同研究員)

- ・実践の効果を評価する仕組みの工夫
- ・成果を発表する体制の整備 等

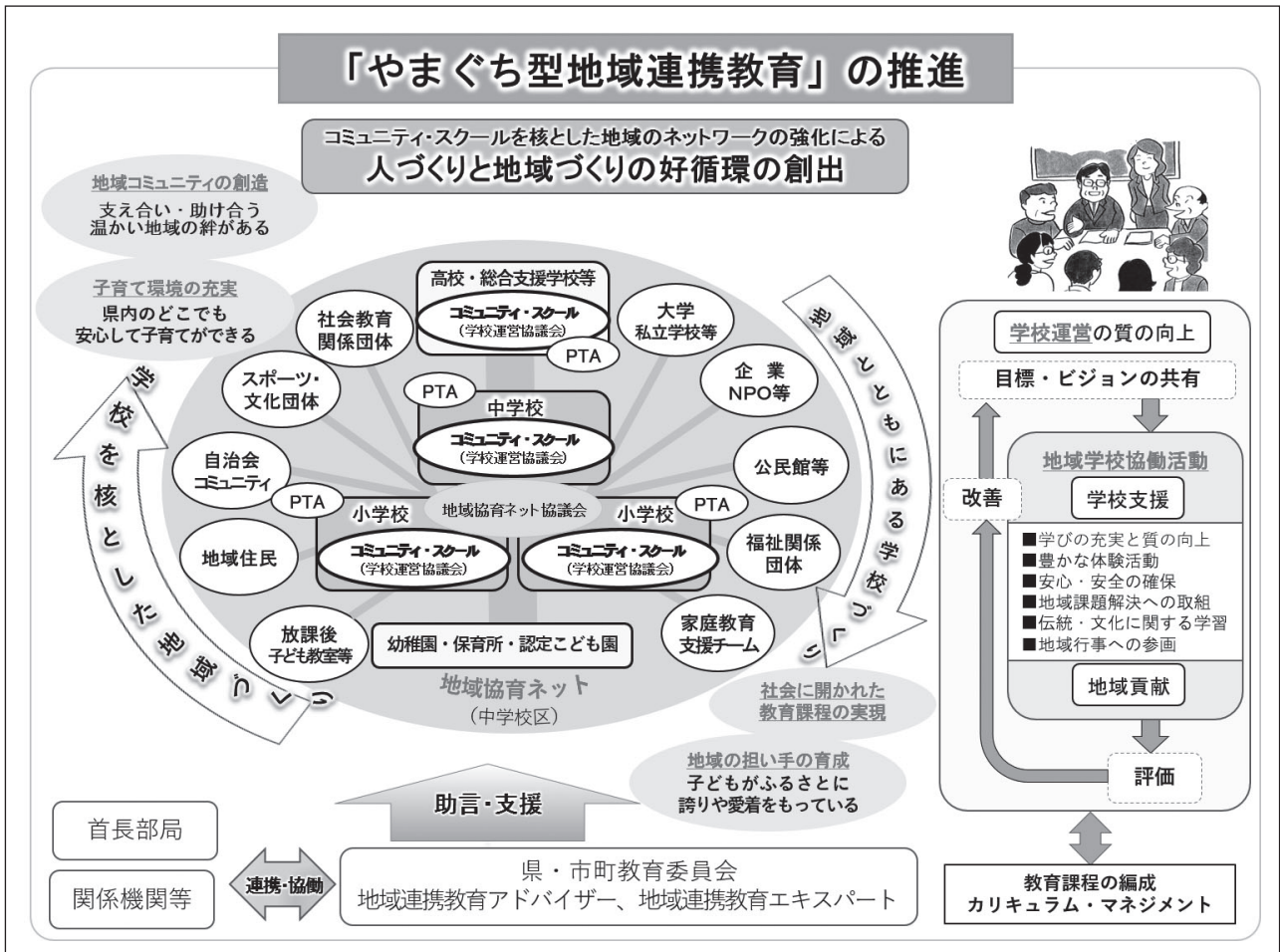


図1 やまぐち型地域連携教育（山口県教育委員会作成）

各学校では、目指す子供の姿を家庭、地域と共有し、その実現に向けてコミュニティ・スクールとしての取組を一層充実するカリキュラムとなり得る「地域連携カリキュラム」が作成され、試行されている。地域連携カリキュラムの実施による成果については、まだ十分に検証することはできてはいないと思われるが、確かな手応えを得ているであろうか。

本校においても、一昨年度から中学校区の合同学校運営協議会が中心となって、第一弾となる地域連携カリキュラムを作成し、昨年度から取組を始めたところである。

図2は、地域連携カリキュラムのカリキュラム表である。

「学習」、「生活」、「健康・安全」の3つの領域で、目指すべき子供の姿、そのために身に付けなければならない力を小学1年生から中学3年生までの発達段階に分けて示すとともに、役割を「学校」と「家庭・地域」とに分けて示すなど、大変分かりやすい構成となっている。これを児童生徒のいるすべての家庭に配付するとともに、地域住民の方にも理解してもらえるように地域内の主だったところに掲示し、それぞれの取組を促しているところである。

すべての項目について一斉の取組を促すことは、なかなか難しい面もある。しかしながら、各学校においては、カリキュラム表の中から子供たちの実態に合った重点項目を提示するとともに、家庭毎に取り組みたい項目について親子で話し合うなど、それぞれの立場で積極的な取組を行うことを求めている。

併せて、中学生、保護者、地域住民と教職員を交えた熟議を行い、この地域連携カリキュラムをいかに実行していくのかについて、みんなで知恵を出し合う場を設けるなどの仕掛けを行ったところである。

「日本一学びが好きな子ども&街」をめざして



川中中学校区 小・中・地域連携カリキュラム

- ◆ 子どもは、大人(家族や地域の人)を見て育ちます。
- ◆ 子どもの時に身に付けた習慣は、大人の基礎になります。
- ◆ 家庭、地域、学校が協働して、子どもに寄り添い、見守り、自己有用感・肯定感を育みましょう。

小中合同学校運営協議会



発達段階		小・1年	小・2年	小・3年	小・4年	小・5年	小・6年	中・1年	中・2年	中・3年	将来像
		どうすればよいかを知り、行動できる		意欲的に行動できる		意欲的かつ主体的に行動できる		自らよりよい判断をして、行動できる			社会的自立ができる
学習について	家庭学習 (自主学習)	学校	◆宿題に毎日取り組む習慣を定着させる	◆自主学習の内容を自分で考えて工夫して取り組む		◆自分で内容や時間の計画を立てて、実践することができる		◆道路を見据えた自主的な学習を促す			主体的な学び
	家庭	□子どもの学習に寄り添う	□子どもの家庭学習の習慣を定着させる		□子どもの自主的・計画的な家庭学習の習慣を促す		□道路を見据えた自主的な学習を促す				
学習について	きく態度	学校	◆相手に体を向けて、終わりまで聞くことができる ◆返事をすることができる	◆相づちや反応を返しながら聴くことができる ◆自分で考えて返事をすることができる		◆自分の考えと比較しながら聴き、状況に応じて話しに自分の考えを伝えることができる		◆話す人の思いや考えを聴き取り、自分の考えと比べ、意見を述べる			的確な状況把握と判断力
	家庭地域	□大人が、しっかりと話を聴く姿勢を示す □良い聴き方や返事の仕方について声をかけ、丁寧に応答する 「聞く」から「聴く」へ	□子どもと会話する時間を確保する □子どもの意見を尊重した会話を心がける 「聴く」から「訊く」へ								
生活について	あいさつ	学校	◆あいさつの大切さを知り、元気づけあいさつができる	◆自ら進んで気持ちのよいあいさつができる		◆時と場に応じた「礼儀正しいあいさつ」ができる			コミュニケーション能力		
	家庭地域	□時と場に応じたあいさつができるように、大人が範を示す									
生活について	言葉づかい	学校	◆はっきりと返事をし、丁寧な言葉づかいで話することができる	◆時と場に応じた「丁寧な言葉づかい」で話することができる		◆社会人の基礎となる言葉づかいが、状況に応じてできる			自他の尊重		
	家庭地域	□時と場に応じた言葉づかいができるように、大人が範を示す									
生活について	整理整頓 (環境美化)	学校	◆掃除の仕方や大切さを理解して掃除をすることができる	◆隅々まで掃除をすることができる		◆自分で考えて時間いっぱい掃除をすることができる		◆奉仕の心をもって自発的に、一生懸命掃除をすることができる			勤労奉仕
	家庭地域	□子供が自分で身の回りの整理や学習用具の準備ができるようにさせる		□家族の一員として、自分の役割を果たさせる □進んで地域や学校の環境美化活動に参加させる							
健康・安全について	公共のマナー 美しい作法	学校	◆正しい姿勢で学習することができる (グー・ベタ・ピン・ボン) ◆身近な交通ルールや公共マナーを知り、意識して行動できる	◆正しい姿勢やマナーを意識して、学習や食事をすることができる ◆公共マナーやルールにふさわしい行動ができる		◆社会人の基礎となるマナーや作法を身に付けて、自然に実践できる					
	家庭地域	□学習や食事の時の姿勢、交通ルールなどを守って行動できるように声をかける □大人が正しいマナーや美しい作法について範を示す		□正しい姿勢やマナーが定着するように声をかける □大人が範となること心がける							
健康・安全について	体力向上	学校	◆様々な遊び方を知り、楽しく外遊びができる ◆授業で学んだことを生かして、進んで体を動かすことができる	◆学校生活の中で培ってきた知識を生かし、体力の向上に努める		◆授業や部活動、昼休みの外遊びにおいて、積極的に活動する ◆生涯スポーツに向けた資質・態度を身に付ける			社会人としてのマナー		
	家庭地域	□外遊びを奨励し、早寝・早起き・朝ごはんの習慣を付ける □運動習慣を確保し、早寝・早起き・朝ごはんの習慣を付ける									
健康・安全について	望ましい生活習慣 (睡眠・メディア)	学校	◆メディアの利用時間を意識して、守ることができる	◆メディアの利用時間や内容を選び、守ることができる		◆メディアの適切な利用の仕方を知り、ルールを守って利用することができる		◆メディアの適切な利用の仕方、睡眠の重要性について理解し、実践できる			
	家庭地域	□メディアの利用に関する家族ルールをつくり、適切な利用ができるようにさせる □発達段階に適した睡眠時間を確保し、望ましい生活習慣が身に付くようサポートする (睡眠時間の目安 9時間) (睡眠時間の目安 7時間)									

図2 カリキュラム表

1-2 次の一手を探る

完全学校週5日制が導入された平成14年には、「地域でできることを考えよう」、「子供の受け皿作りを進めよう」という発想から、放課後子ども教室などの事業が展開されるとともに、プレイパークが各地に建設されるなど、社会全体で子育てをしようという風潮が生まれた。

しかし、今はどうだろうか。国が推進した放課後等における子育て支援に関する施策の中で生き残ったものは「児童クラブ」だけではないだろうか。

つまり、保育に対するニーズの掘り起こしが進み、児童クラブが子供の新たな居場所として定着はしたものの、子供たちに様々な体験をさせ育てようといった教育機能を果たす仕組みは、残念ながらほとんど残っていないし、残っていてもその役割を十分に担っているとは言いがたい状況である。

それでは、なぜ残ってこなかったのだろうか。

それは、そこに関わる人を育ててこなかったからであり、「地域不在」、「学校不在」で仕組みを作ろうとしたからである。多くの人が「みんなで子供たちを育てよう」という思いで協力はしたが、何のためにそれを行うのかといった目標等の協議は行われず、方法論的な協議ばかりであったのではないだろうか。これでは、次第に「やらされ感」を強く感じることとなり、自らの主体的な行動を支える「手応え」や「やりがい」といったものを感じることができなくなっていたに違いない。

また、残念ながら、そこには学校が地域と前向きに関わり合おうという積極的な関係づくりができていなかったことも理由の一つであろう。

こうした中で始まった学校支援地域本部事業や山口県の地域協育ネット事業が、新たな学校と地域の関わり方とともに地域住民主体の取組の必要性を再考させる重要な役割を果たしてきた。

そして、この流れを受けて始まったのがコミュニティ・スクールである。

当初は「そんなことをしなくても地域や保護者との連携はできている」とか、「会議を増やさなくてもコミュニケーションは十分だ」といった意見が聞かれた。けれども、実際にコミュニティ・スクールとしての取組が始まり、学校運営協議会を中心として様々な協議と新しい取組が試行錯誤される中で、これまでとは違った「新しい関係づくり」の必要性が理解されるようになってきた。

一方で、この状況を手放しで喜んでばかりはいられない。このような状況が生まれてきたのも学校の力による部分がほとんどであり、学校が頑張っているからできていることを理解しなければならない。

地域の力が、子供たちの成長に大きな成果をもたらすことは明白である。ならば、その力を自らが発揮できる仕組みを作ればいわけであり、その仕組みを作るきっかけとなりうるのが、この地域連携カリキュラムであると考ええる。

現状に満足せず、課題を明確にしながらいよいよ在り方を模索していこうという発想なくして、喫緊の課題である業務改善を図りながらも、地域や保護者と効率的・効果的に連携した新しい学校づくりは進められない。

1-3 地域連携カリキュラムに期待すること

地域連携カリキュラムを、「学校における教育課程と地域カリキュラムの融合・協働したカリキュラム」として捉えることはできないだろうか。

ここでいう「地域カリキュラム」とは、関わるすべての人が共有できるように、地域行事が潜在的に持っている目標と手立てを顕在化し再構成したカリキュラムのことである。

この地域カリキュラムと学校における9年間の教育課程のゆるやかな接続を図りつつ、目指すべき子供たちの育ちを支えていくのである。これは決して新しい発想ではない。かつて学校の役割、家庭の役割、地域の役割が、それぞれ果たされていた時の隠れたカリキュラムを顕在化させ、再分担するのである。

しかし、私たちを取り巻く情勢が大きく変化している中、時代の要請に応じた新たな役割があることをそれぞれが理解し担わなければならない。

本稿が目指す地域連携カリキュラムは、同じ地域にある小・中学校と地域とのつながり（ネットワークに近いゆるやかな結合）の基盤をなすものである。

今までは、それぞれの学校が自校の特色を生かしながらも、地域にある学校として地域関係団体と連携しつつ地域行事等への協力を行ってきた（図3）。これからは、この地域連携カリキュラム策定という作業を通して、地域連携カリキュラムという基盤の上で、15歳までの連続した育ちを相互に効果的に補完し合いな

から担保する体制を整えるものである（図4）。

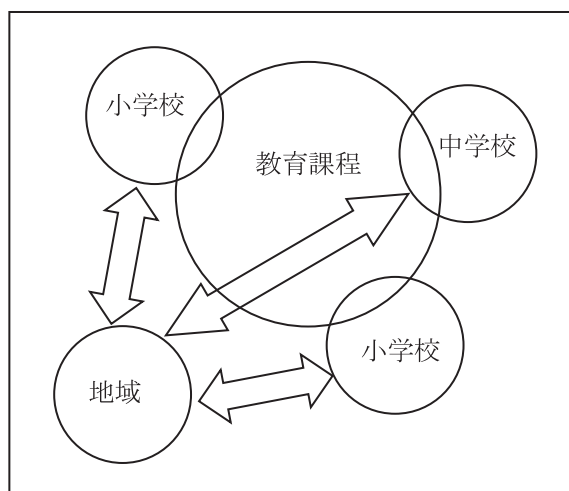


図3 今までの関係

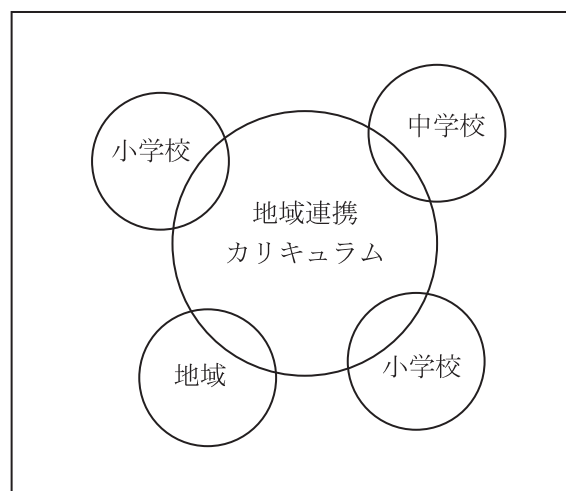


図4 これからの関係

1-4 自治力を育む

この地域連携カリキュラムの成功の鍵は、「地域住民の自治意識の醸成」である。

コミュニティ・スクールとしての取組の推進により、学校と地域の関係は非常に密接になってきた。様々な行事で学校側の意図した仕掛けが見られ、子供たちが多様な場で体験・活動している機会も増えている。地域の方からも、「学校の協力により地域が活性化してきた」といった学校にとってうれしい言葉をいただいたりもしている。

しかし、本当にこれが、「連携」の先の目指すべき姿なのだろうか。

目指すべきことは、それぞれの「自治力」を高めることにあり、その成果として、それぞれの持つ教育力を発揮して子供たちを育てることができるようになることである。

このように、地域と学校を子育ての両輪と考えるならば、残念ながら、今はまだ学校側の車輪だけで動いている場合が多い。

地域の方々が主体となり、「こういうことなら、自分たちはこういう仕掛けでそこを目指してみたい」という見通しをもって、実行に向けて自分たちで前向きに協議ができるようになって初めて、地域連携カリキュラムが動き出したと言えるのではないだろうか。

地域と学校、この両輪が動き始めて、ようやく地域と学校が対等に子育てについて議論することができるのである。

2. 本校の取組の実際

2-1 本校の歩みから

本校においても、コミュニティ・スクールとしての取組の推進に当たって、学校運営協議会を中核として学校運営や教育活動支援、環境整備の支援など、様々な活動が展開され、多くの方が学校を訪れ、子供や教職員とふれあう機会が増えている。

そのおかげで、学校教育に対する理解は深まり、以前に増して「学校は地域の中心」、「子供たちをみんな育てる」という意識が醸成されてきた。

また、地域住民が関わる活動が、補助的な活動から学習の中核となる活動に移行してきた。

こうした取組を進める中、本校で意図的に行ってきたことが「子供を地域で育てるための環境を整える」ということである。

これまでの本校の取組と、地域連携カリキュラムを活用したこれからの見通しを進行予定表で示すと次の表1のようになる。

表1 進行予定表

[ステップ1] 目標の設定と共有
[ステップ2] 学校における様々な活動の展開（学習支援・環境整備など）
[ステップ3] 地域活性化への支援
[ステップ4] 地域連携カリキュラム①の策定・試行 <ul style="list-style-type: none"> ・「日本一学びが好きな子供&街をめざして」 （目指すべき子供の姿と大人のすべきことを提示）
[ステップ5] 地域連携カリキュラム②の策定・試行 <ul style="list-style-type: none"> ・地域カリキュラムを活用した新たな地域連携カリキュラムへの挑戦

現時点では、中学校区校長会において [ステップ5] に取り組み始めたところである。

2-2 「地域を主役」にする仕掛け

本校におけるこれまでの取組の中で、[ステップ3] が大変重要であった。

「くまの応援隊」に象徴されるように、地域の人が関わり助け合う中で「つながり」を深め、地域を活性化しようとするのが本校コミュニティ・スクールの推進の基盤となっているからである。

それ故、学校の教育活動の支援を中核に据えながらも、地域住民同士がふれあう場を意図的に仕掛けるとともに、地域行事の活性化に子供だけでなく、保護者も教職員も関わる仕掛けを講じてきた。

2-2-1 くまの応援隊

「くまの応援隊」（図5）は、応援隊に登録した保護者や地域住民が、学校に集まり、学校で配付する印刷物の印刷、図書室の掲示物の作成、子供たちへの本の読み聞かせ、学校花壇の手入れなどを行っている。

しかしながら、単に学校の教育活動のみを支援する応援隊ではなく、熊野地域全体の応援をしていこうというコンセプトのもとに結成された組織である。

これまで、地域住民同士がふれあう場として「ふれあい集会」（図6）や「大人の学び場」（図7）等を企画し、実施してきた。

熊野オリジナル

「くまの応援隊」

地域が大好きな方々の集まり

くまの応援隊は、学校の応援隊ではなく、熊野地域の応援隊です。地域の方だけでなく、教職員も、子どもたちも参画できる組織です。熊野に住む人や、熊野で働く人、熊野が好きな人なら誰もが有資格者です。

図5 くまの応援隊

くまの応援隊

**現在登録
90名**

**自己有用感を
高める**

**あなたの
おかげで！**

今年度も実施！

くまの応援隊 ふれあい集会

会場：熊野小学校
10月18日(木)11時～

9時

9時00分 開会式 9時00分～9時15分

9時15分 読書会 9時15分～9時30分

9時30分 自由活動 9時30分～9時45分

9時45分 閉会式 9時45分～9時55分

ふれあい・御礼会・つながり

図6 ふれあい集会

地域と保護者がつながる「大人の学び場」

学校と地域をつなぐ取組
H29年10月～H31年2月

ALTが講師	英会話教室 10回実施	ハングル語教室 保護者が講師	7回実施
地域の方が講師	アワー・アレンジメント教室 7回実施	パソコン教室 PTA会長が講師	2回実施
熊野地区スポーツ推進委員が講師	スポーツ教室 1回実施	合唱教室 合唱のベテラン元教員が講師	1回実施

**計28回実施
約15人×28回
約420名が来校！**

大変好評！
今年度もリニューアルして実施します！

図7 大人の学び場

2-2-2 地域行事への参画

子供たちが、地域行事に積極的に参加し、参加者が増加することで、行事の内容や仕組みにも変化が生まれている。地区運動会では子供を意識したプログラムづくりが進められるとともに、子供と地域住民とのふれあいの場づくりが行われている（図8）。

地域行事を運営する方からも、「住民の参加が固定化し減少する中で、子供たちが行事に参加することは地域としても有り難い」という声をいただくなど、地域住民の目が確実に子供たちに向いていることを実感している。

地域行事の有用性と可能性、そこに関わる人の持てる力を価値付けることで、次の高みを目指すことができるのである。

ここで大切なことは、子供たちの成長につながっている手応えを地域の方々に実感してもらうことであり、それが「地域が主役」の子育てにつながるのである。この「手応え」が「やりがい」につながらなければ、地域連携カリキュラムは、「主役不在」のカリキュラムとなる。

併せて、ここで「主役はあくまでも学校」という発想からの脱却を図ることが大切である。その一手となるのが、教職員と保護者や地域住民と一緒に地域連携カリキュラムを作り上げる過程である。

共同で策定することを通して、互いの取組や状況をより深く理解することができる。そして、地域の子供たちを育てる当事者として、自分たちにできることとそれぞれが果たすべき役割を自覚することができるのである。



図8 地域行事への参画

2-3 更なる高みへ～新たな「地域連携カリキュラム」への挑戦～

続いて、本稿の中心提案である「ステップ5」についてである。

先に述べたように、現時点では、中学校区校長会での素案づくりの段階であり、まだ、整理できていることは少ない状況ではあるが、今後の目指すべき方向性ということで、これからの見通しを述べていくこととする。

まずは、設定すべき目標についてである。[ステップ4]で既に策定している地域連携カリキュラム①に示された目標を基盤として、次のように考えている。

目標： 地域行事等への参加・参画及び住民とのふれあいを通して地域住民として自覚とともに、自己有用感・肯定感を育む。

併せて、地域カリキュラムとして検討すべき行事を次のように整理したところである（表2）。

表2 地域カリキュラムとして検討すべき行事

月	川中中学校	熊野小学校	川中小学校
7月		熊野夏祭り	
8月	川中夏祭り		川中夏祭り
	川中中学校区「熟議」		
9月		熊野ふれあい運動会	
10月	コスモス祭り		
11月	川中ふれあい運動会		川中ふれあい運動会
	川中地区文化祭		
12月	しめなわづくり		
2月	ウォーク・ラリー		
3月	弥生祭り		

実際の策定作業に当たっては、まずは、できそうな行事から取り組むことがポイントである。例えば、「熊野ふれあい運動会」を例にして、これからの手続きを考えてみる。

この行事に着目した理由は次の3点である。

- ① 参加者の半数近くが子供であり、子供が参加できるプログラムが多い。
- ② 運営の仕事の中にも、子供たちの力が発揮できそうなところが多くある。
- ③ 学校においても、子供たちは運動会（運営も含めて）を経験しており、その経験を生かすことが可能である。

それでは、どのように協議を行うことがよいのだろうか。協議において整理すべきポイントは、次のとおりである（表3）。

表3 協議において整理すべきポイント

地域カリキュラム名	熊野ふれあい運動会	
実施時期	9月末 日曜日	
実施団体	〇〇〇〇〇	
行事の役割と成果等	[役割]	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[目標の再設定] 今までの行事の評価（果たしてきた役割）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子供の育成」という視点 ・「地域人（大人）の育成」という視点 </div>
	[成果]	
[課題]		
目指すべき子供の姿		
子供に期待すること ・経験してほしいこと ・感じてほしいこと		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[実行プランづくり] 目指す目標の具現化とそのため手法 ※大きくプログラムを見直すのではなく、 やり方を工夫する。</p> </div>
改善点		
関係団体に求める支援		

この中でも、「目標の再設定」が重要である。

地域行事においては、幼児から中高校生くらいまでの幅広い子供を対象として、年間を通して複数の行事が実施されているため、行事毎にその行事が果たす役割を明確に分別することは困難かもしれない。

それ故に、年間を通して取り組むべき大目標を大まかに区分けした対象年齢毎に設定するとともに、各行事の小目標を設定するようなことを考慮しなければならないであろう。

また、実際の運営に当たっては、学校が担う役割として、行事の準備段階で子供たちに運営に当たってのヒントや心得について情報を提供するなどの側面的な支援や、行事の終了後には振り返りや評価などの子供たちのつながる学びを支える仕組みづくりの支援が必要である。

これから、これらの素案を元に関係団体と協議しながら地域連携カリキュラムを具体的に策定していくことになる。そこで、まずはこのカリキュラムの必要性と有用性を理解してもらわなければならない。その手始めが、各学校運営協議会における協議である。協議の中では、この素案の中には示されていない、PTA関係の行事等も新たに組み込まれるかもしれない。逆に、前向きな意見ばかりではなく、新たな負担が生じるのではないかという不安からの拒否反応が出るかもしれない。

できるところからでいい。小さな成果をあげることをまずは目指すべきである。

その際、学校側からの提案が先行するのではなく、地域行事のもつ価値を適切に評価するとともに、その中に今まで隠れていたカリキュラムを顕在化させることに力を尽くすべきである。そこから新しいカリキュラムとして再構築していくことが、最もふさわしいやり方であろう。

3. 今後の見通しと課題

この新たな地域連携カリキュラムを策定することも必要なことであるが、次に考えなければならないことは、このカリキュラムを、行事等に関わる人だけでなく地域全体に周知し理解してもらうことである。多くの場合、ほとんどの住民が地域行事の必要性と価値をわずかながら感じつつも、本来の目的を正しく理解しているとは限らない。

ましてや、新たなカリキュラムとして再構築されても、地域全体が「みんなで子供を育てに取り組もうとしている」という意図を感じるだけでは、一人ひとりの住民に「私にもできるかもしれない、やってみよう」というような「差し手感覚」が生まれるはずもない。はじめは関わる人と子育て中の保護者にターゲットを絞り、理解を促していきたいものである。それだけでもきっと、今までとは違った成果が見えてくるはずである。

併せて、その取組の成果を周知する情報提供が定期的に繰り返し行われれば、少しずつだが多くの住民に身近な取組として感じてもらうことができるのではないだろうか。そのことが、「あいさつ運動」などの「自分たちでもできる日常の活動」に変化をもたらすことを期待している。

おわりに

本来、今年度から各学校運営協議会での協議を各主催団体等と協議を進めながら、策定作業を行うこととしていたが、新型コロナウイルス感染症によりすべての活動が中止されている現下では難しい状況である。

また、これと同時に、再構築する地域カリキュラムと教育課程をいかに効率的・効果的につなげていくことができるかの議論を学校で始めなければ地域連携カリキュラムは完成しない。

カリキュラムは一度に作り上げることができるものではない。進めることができる行事から一つずつ協議を積み重ねつつ、できたところから試行していくことが必要である。

やりながら考えていく中で、新しい関わりが学校と地域の間にてきていくことを期待している。

最後に、地域の方からいただいた言葉を紹介したい。

「大人を動かすつなぐことは難しい。しかし、子供たちの笑顔があつて地域は活性化する。つながることの大切さ、素晴らしさを感じた子供は将来地域を支えてくれる大人になってほしい」

参考文献

田村学：「カリキュラム・マネジメント入門」，東洋館出版社，2017。

美作健悟・静屋智・池田廣司・田中由起枝：「『社会に開かれた教育課程』を実現する地域連携カリキュラム創造の第一歩」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第48号，pp. 141-150，2019。